

●思想史の風景(3)

フランクフルト番外地

1

フランクフルト学派というものがあつたらしいと気がついたのは、一九五〇年代なかばに、ボルケナウの『封建的世界像から市民的世界像への移行』(一九三四年、邦訳は一九五九年みすず書房)の解説を書くころであつた。もちろん、この本が、フランクフルト社会研究所の双書の一冊であつてみれば、集団としての研究所の活動に関心をもつようになるのは、あたりまえである。そのうへ、おなじ双書のなかのヴィトフォージェル『シナの経済と社会』、グロスマン『資本主義体制の蓄積と崩壊の法則』、ポロツク『ソヴィエト連邦における計画経済のこころみ』は、戦前に邦訳されていて、学生時代から知っていた。

だから、はじめにぼくが考えたフランクフルト学派は、研究所の二代目所長、ホルクハイマー(一九三一年一月就任)を中心として、前記の三名のほかに、コルシュやルカーチ、さらにはマクス・ペーアやオスカル・ランゲなど機関誌への寄稿者であつた。ペンヤミン、マルターゼ、フロムは、枠のなかにははいってはい



水田洋

が、全体としてのフランクフルト学派の主流は、正統派ではないまでもマルクス主義の色彩がかなりつよいものとおもわれた。ところが、数年のちに学生反乱と新左翼の時代がきて、にわかマルクス主義を基調としていたが、中心人物はホルクハイマー、ペンヤミン、アドルノ(学生反乱の衝撃で死んだといえよう)、マルターゼ、フロムであつて、かつての左派は、死亡をふくむそれだけの事情のために、ほとんど姿を消していた。たとえば、リヒルト・ゾルゲは、すでに一九四一年に日本で処刑されていたが、一九五一年に病死し、ボルケナウも一九五七年に急死した。ランゲがポーランドに帰ってからの活動は、よく知られているとおり、フランクフルト学派とは関係がない。したがって、マーティン・ジェイの『弁証法的想像力——フランクフルト学派と社会研究所の歴史、一九二二—一九五〇年』(一九七三年、荒川幾男訳、みすず書房、一九七五年)も、かなり視野をひろげているが、そこでの学派の中心は、ホルクハイマー

アドルノの線であつて、左派ではない。フランクフルト学派が、学派としてうけとられ、影響を与えたかぎりでは、そのとおりであつた。しかし、フランクフルトの社会研究所の設立は、そういう集団を生みだしただけではなく、さまざまな波及効果をもつていた。いわゆる左派の発生もそのひとつである。

2

研究所が、フェリックス・ヴァイルの資金によつて、一九二四年六月に設立されたとき、初代の所長として招かれたのは、ヴァイン大学教授、カール・グリュンベルクであつた。ヴァイルは、富裕な穀物商人の息子で、カール・コルシュによつてマルクス主義にみちびかれたのであり、グリュンベルクは、一八九七年にヴァイン大学の私講師となつたオーストロ・マルクス主義者であつた。ジェイが引用している学生の手紙は、当時の研究所を支配する教条的マルクス主義の雰囲気をつたえている。この創設期の研究所から、グリュンベルクの系譜をヴァインへさかのぼることもできるが、ここでは逆に左派の流れをくだつてみよう。

もっとも、だれが左派であつたかについても議論がありうるもので、非主流ぐらゐのよびかたの方が、安全である。そういう人びとのうち、たとえばオーストロ・マルクス主義のなかでそだつたポール・ラザルスフェルドは、アメリカに亡命して、社会調査の創始者となつたし、ドイツ共産党員であつたヴィトフォージェルは、やはりアメリカにきてから、あとののべるように右傾した。ドイツ社会民主党執行委員会の法律顧問であつたフランツ・ノイマンは、アメリカに亡命してから、『ビヒモス——国民社会主義の構造と実践』(一九四一年)を書いたが、一九五四年にスイスで、自動車事故のために死亡した。この三人は、それぞれ、アメリカの学界に影響をあたえた。ラザルスフェルドは、すでに一九三三年にロックフェラー財団の奨学金でアメリカにきていたが、ヴィトフォージェルとノイマンは、亡命してコロンビア大学に職をえたのである。ラザルスフェルドが、いかにもアメリカ的な研究領域で、またヴィトフォージェルが、ヨーロッパよりもはるかにアジアへの関心がつよいアメリカで、学問的評価をえたのに対して、ノイマンは、ヨーロッパの

誠信書房

占星術

科学が迷信か

アイゼンク他/岩嶋・浅川 訳
星占いは果して科学か迷信か? 科学的資料をもとにこの神秘の謎に迫る。 2500円

母子間の

コミュニケーション
唯物論的社會化理論の
基礎づけのために

ロレンツァー/青木基次 訳
精神分析と史的唯物論の対決の中で、子どもの発達、社會化過程を究明。 2300円

砕かれた心

脳損傷の犠牲者たち

ガードナー/酒井・大嶋 訳
脳損傷によって生じる高次精神機能の障害について多角的に考察。 4800円

イメージ心理学 3

イメージの人格心理学

水島恵一・上杉 喬 編
イメージとパーソナリティに
関する新たな知見を中心に編
集した注目性の書。 3000円

老いのスケッチ

アメリカ老人の光と影

C. 木村哲子 著
ロスアンゼルスで老人ホームを経営する著者がアメリカの老人の
実像を新鮮なタッチで描
いた好エッセイ。 1500円

112 東京都文京区大塚3-20-6

電話 946-5666(代表)

G. Orwell

世界の歴史と文化を
動かした16,000余名

キリスト教人名辞典

●内容見本
西洋文化の根源であり、世界の歴史と文化に深い影響を及ぼしたキリスト教2000年の歴史を知る上で欠かせない人々の思想と行動。哲学、思想、文学、音楽、美術、教育、政治に及ぶ幅広い分野を網羅。西欧のみならず、東欧、中南米、アジア、アフリカ等も広く網羅。



好評発売中
刊行記念 特価39,600円
(特価期間7月末日まで)
■B5判・2114頁・定価43,000円

日本キリスト教団出版局
東京都新宿区西早稲田2-3-18
振替東京8-145610 千160

(ドイツの、そしてフランクフルト的な)学風を、アメリカに移植するのに貢献した。カール・ショースキー、ビーター・ゲイ、デヴィッド・ケトラーなどは、ノイマンの弟子であった。ノイマンは、他の二人とちがって、アメリカの政治的学問的風土に順応することなく、マッカーシズムと冷戦に批判的であった。これに対して、赤狩りに協力したワイトフォールゲルは、少年時代にヴァンダフォーゲルへの参加によってブルジョアの価値体系に反逆したの手はじめに、第一次大戦後のドイツ革命では、独立社会民主党からドイツ共産党に参加して活動し、雑誌『マルクス主義の旗のもと』にも、しばしば寄稿していた。トレルチとヴェーバーを「陰性マルクス主義 Kyptomaxismus」の二人の古典的代表者(五巻一号、一九三一年)とかがよんだことが、「陰性マルクス主義」という用語のはじまりではないかとおもう。かれがフランクフルトの研究所に関係したのは、グリュンベルクの時代からであって、いまあげた論文の公表は、ちょうどホルクハイマーの所長就任のときである。『シナの経済と社会』の出版もこの年であり、それらのことは、ワイトフォールゲルにとってホルクハイマー時代の研究所が、かならずしも親近性をもたなかったことを推測させる。

しかし、かれはひきつづき研究所に籍をおいて、反ナチスのパンフレット活動をつづけた。このこともまた、所員のなかでは例三三年にスイスにのがれようとして国境警察に逮捕され、数か月の収容所ですごさなければならなかったのである(国際的な学界は、中国研究によって学界における地位を確立したが、戦後まも

ないころから、アジア的水利社会の専制的性格が、ロシアと中国の共産党政権を規定していると主張しはじめ、オーエン・ラティモアのようなアジア研究者ともたもとをわかった。ラティモアと国務省および太平洋協会への「破壊活動分子」の滲透について証言したときに、決定的となったのである。

この証言の結果、ワシントン大学(シアトル)におけるかれの教育活動は、不人気のため二年間中断され、再開されたときも、受講者二名、ゼミナールは希望者なし、という状態であったが、さらに、一九五七年には、この証言で共産党員であったとされたカナダのエジプト駐在大使ハーバート・ノーマンが、自殺するにおよんで、ワイトフォールゲルの孤立はふかまった。「大学人が知られている。しかしかれらが、学者共同体の連帯を破壊すること人びとをゆるすことはないだろう。そういう人びとにたいしては、かれらは強力な員がら追放を実施するのだ」と、コーザーは孤立しますます頑固になったワイトフォールゲルについて、書いている。

3

ボルケナウは、一九〇〇年にウィーンの高級官僚の家庭にうまれて、ジェジュイットのエリート高校で教育されたが、第一次大戦後の知的反乱の洗礼をうけた。ライプツィヒ大学の学生時代(一九二一年)にドイツ共産党に入党、Ph. Dをとってから、一九二四年にコミンテルンに参加して、ベルリンのソヴェート大使館内で、エフゲニー・ヴァルガの指揮下に国際政治経済(とくに表明である。戦後にはさらに『ヨーロッパ共産主義——一九一七年から現在まで(一九五二年)』を書くが、これについて「余りに感情的なので読むのによほどの忍耐を要した」といったのは、元防衛大学校長猪木正道であった。

すでに終戦前に『ホライズン』への論文(一九四四年)で、ソヴェートとドイツの全体主義をギリシャ正教とルター主義(エルベ以东)によって説明していたボルケナウが、戦後のドイツ民主共和国をどうみても、容易に想像できる。マールブルク大学の歴史学の教授にまねかれたのにまもなくやめてしまったかれは、反共ジャーナリズムで生活をささえながら、かつて学生時代に読んで拒否したシェンクラーの『西洋の没落』に対抗すべき、ヨーロッパ文明史を書きつづけた。それは、『ホライズン』の論文の拡大ともみられるし、最初の著作の延長ともみられるであろう。しかし、かれが一九五七年五月一八日に、チェーリヒのホテルの一室で、心臓発作のため五六歳で急死したとき、「一人称話法の成立」にはじまる大著は、「ローランの歌」までしか書かれていなかった。

(みずた・ひろし)

ヨーロッパ諸国の社会民主党の状況)の分析を担当していたホルケナウは、一九二八年にスターリンの極左政策(社会民主党を主要な敵とみなす)がはじまるとともに(ヴァルガはモスクワに召喚される)、しだいにコミンテルンおよびドイツ共産党から遠ざかり、一九二九年末には除名されたのである。

この略歴によれば、はじめにあげたかれの大著は、序文が「一九三二年九月、ウィーン」となっているから、三年たらずのあいだの仕事だということになる。もともと歴史的関心があったらうだし、ジェジュイット高校以来のラテン語の素養はあっただろうが、やはりおどろくべき才能といわなければなるまい。しかし、数か月のちに成立したヒトラー政権は、かれをイギリス亡命へおいこみ、思想史研究は中断する。『パレット』(一九三六年)は、亡命生活を支えるためにパナマの大学で講義をしたときの成果であり、そのほかの著作活動は『スペインの戦場』(一九三六年)をはじめとして、ほとんど現実の政治問題に集中している。

そして、スペインでの体験は、ソヴェート本国でのスターリン粛清の情報とあいまって、かれを共産主義から決定的にはなれさせた。『共産主義インタナショナル』(一九三八年)が、その態度

3

3

40